

この社会の社会学

第2回

人々から問いを引き受ける

世界 SEKAI 2025.03

筒井淳也 × 亀田達也
(立命館大学) (明治学院大学)

普段扱うのは同時代的に生きる人たちのあいだでの家族関係の違いが中心です。たとえば、結婚後の親との付き合い方は男性と女性で違うのかなどを調べると、現在進行形の家族の変化がみえてきます。そういった作業を通して、現在私たちが当たり前だと思っている家族が全然当たり前ではないこと、家族の別の姿も示すのが一つの目的といえるでしょうか。

亀田 私の出身は社会心理学なのですが、「専門は？」と聞かれると少々ためらってしまいます。それは、問いへの答えを人の心理に回収していくことにそれほど強い情熱をもっていないからで、「これこそ社会心理学」というイメージからは、おそらくかなり外れている。そのため自分の専門を「実験社会科学」と呼んでいます。

この場合の実験というのは、ある変数を操作することで、従属変数にどういった影響をもたらすか、ラボの実験であれ現場の実験であれ、状況に介入し精度の高い観測を行なうことで因果関係的な理解をしようとするものです。私が関心をもっているトピックとしては、正義、共感性、格差、集団意思決定、集合知などが挙げられます。研究のコアにある視点は、「協力、共感性、正義やモラルの感覚など、人間あるいはヒトに備わっている基礎的なブロックの働きから社会・集団現象を理解したい」ということでしょうか。

社会学が現在の社会を対象とするとき、そこに生きる人々や社会そのものをどのように捉えているのか。その眼差しは、社会を扱うほかの学問とどう異なるのか。社会学者（家族社会学・計量社会学）の筒井淳也氏、そして実験社会科学者の亀田達也氏の二人が、社会を捉える多面的な視点について議論を交わした。

人類共通の普遍性が、ローカルな社会の傾向か

筒井 私は家族社会学が専門で、主にサーベイ（調査観察）データを用いた分析を行なっています。

サーベイデータといってもいろいろで、なかには非常に長期的な傾向を示すことに使えるデータもあります。たとえば、何世代か前かは多産な時代で、おじいちゃん・おばあちゃんには孫がたくさんいたけど、寿命も短かったので孫と一緒に生きる時間が短かったし、初孫が生まれる前に亡くなってしまう方も多かったんです。あるいは、昔は多くが大家族だったと思われていますが、実は意外にそうではなかったこともわかってきている。そうした人口学的な変化や関連する経済的な変化によって、「家族」という概念の中身自体が変化していく、そういったことに注目しています。

ただ、長期的なデータは集めにくいこともあって、私が

それを心理だけでなく、社会的なコンテキストや歴史、文化などから捉える、そういう分野横断的なアプローチが実験社会科学だと考えています。

筒井 「基礎的なブロック」という言い方をされましたが、その発想を強く受け止めるかどうか、社会学と異なる面としてありそうです。

ひとつ例を挙げると、教育社会学に「相対的リスク回避モデル」という理論があります。子どもが親より下の地位になることを回避すべく、親が学歴を取得させようとするという傾向をモデル化して、実証しようという研究です。イギリス発祥のこの考え方を議論の上で日本にもち込み、数理的に組み込んで実証するわけですが、それでもこの理論は特定の時代や社会、単純に言えば特定の時代と地域の近代社会にしかあてはまらないモデルで、親は高卒、子どもは大卒が当たり前の段階には当てはまりません。社会学の多くの理論は、特定の社会・地域にはおそらく当てはまるけれど、時代や社会を超えて適用されることは、そもそも想定しない。

社会学は、「人間には普遍的な傾向があり、基礎的なブロックを積み重ねることで社会が理解できる」という発想をしてこなかった。社会学の研究の多くは、その時代や社会へローカルに適用するモデルをつくって実証するもので、

百年経ったら意味がなくなるものです。そこには、『同じ人間』に同じ刺激を与えたら同じ反応が返ってくるだろう、という同質性の発想が弱い。

逆に言えば、同質性の想定ができるのならば実験が選択肢に入ってくる。亀田さんのご著書を読むと、実験社会科学は社会学に比べて同質性の指向性が強いように感じます。

複雑な社会と基礎的ブロック

亀田 「相対的リスク回避モデル」とは、子どもの職業地位を自分と同等以上のものにしたいというドライブが働いて、教育投資をするという話ですよ。イギリスと日本の間で、少なくとも近代社会のなかでの普遍性を仮定して、日本に当てはめている。動物との連続性で考えれば、もちろん学校教育は動物に該当しませんが、自分の遺伝情報を子孫にいか伝達するかという生物学のセントラルドグマの枠組みで、Parental investment theory (親の子に対する投資理論) の文脈でも考えられそうです。

人間は社会をつくって生きていますが、その社会に「信頼」や「正義」「共感」などさまざまな基礎的ブロックの働きを想定します。たとえば産業社会では「信頼」が社会の基礎的ブロックですが、同じ「信頼」が農耕社会で必要かという、実はわからない。信頼が必要となるような社

会もあれば、そうでない社会もある。人間がある程度生物として備えているものが、社会の中でより拡張されていくというイメージで考えられる。「協力」や「信頼」に関わる根本のパーツが何らかの生物学的な形で存在するならば、それがどういった社会のコンテキストで発現し、他方どのような形で制約されるか……といった発想を僕はしますね。
筒井 それ自体は、違和感のないお話です。社会学の中にも実験や数理モデルを扱うタイプの研究者はいますが、どちらかといえば普遍主義的な傾向があり、社会心理学で見いだされた知見を研究の中で参照することもあります。もちろん社会学の中でもいろいろと分野があつて、複雑な社会制度や社会変化を扱う研究では、基礎的なブロックとしての信頼とか集合知、分配的正義の議論など、あまり参照しません。

私は社会学者のなかでは他分野の研究者と交流があるほうだと思いますが、たとえば合意形成のメカニズムや集合知など、社会心理学や実験社会科学で華々しく明らかになってきた知見がある。でも、社会学者は今ひとつそれを参照していないようで、もったいないと感じます。ただ、ローカルな、あるいは複雑な世界を説明しようとする、基礎的ブロックを組み立てて説明することが難しいのです。

あるいは、様々な事例研究やフィールドワークを行ない、

ローカルな世界はこうなっているのがわかる。ただ、そこで見いだされた知見は他にも応用できるかもしれない——そうした普遍化に進む動機が、社会学では薄いのかもしれません。時代・社会限定的な場面を説明することが目的で、それが普遍的にあてはまるのかどうかに関心がない。

理論とデータの「粒度」

亀田 私は講演で「感銘を受けた本」を問われると、その一つに必ずイギリスの社会学者、ポール・ホイリスの『ハマータウンの野郎ども』をあげるんです。労働階級の若者たちへのフィールドワークに基づくこの本は、個別の地域と時代の事情を抜いて、階層によつて教育のあり方、受け止め方が全く異なることを説明しており、とてもしつくりきました。具体性の面白さがある一方、同じような原理をそれを極までもつていくと、生物の適応戦略にまで至るとも考えてしまう。あれはハマータウンという、イギリスの一都市という個別の文脈を外さないことが大事なのか、そのあたりの感覚はどうですか。

筒井 それは両方あつていいと思うんです。ローカルな社会を説明した知見が、普遍的な理論を着想するための資源になりうるわけで、『ハマータウン』が時代を超えて読まれていること自体が、「我々の身近にもある」と感じさせ

る、ある種の普遍性の実感を伴っているのだと思います。

ただ、研究の姿勢は違う。見いだされた仮説を検証するためにフィールドワークをするわけではなく、「何かよくわからないことが行なわれている」という自分なりの違和感をもつて、探索的に降りていく。そこで、「なるほど、これはそういうことか」と理解をしていく。そして理解したことから、時代や社会を超えて共感を呼ぶような知見が結果的に見出される、ということはあると思います。

亀田 今おっしゃったのは、筒井さんが以前書かれていた「人々からの問いを引き受ける」ということですよ。

私も「データから問いを引き受ける」という面はすごく強くあるんですが、他方で理論とのマッチングも非常に大事だと感じます。理論の側の粒度が実験の粒度を規定する。物理学はその究極例ですね。現状の社会心理学では、残念ながら理論の粒度が極めて粗いために実験の粒度も粗いということがしばしば起こります。私は、理論では数理モデル化がもつと必要だと思ひ、データも行動やアンケート質問だけでなく、生理的な反応や認知的な活動、脳の活動を含むマルチの測定によつて、データの解釈がフリーハンドにならないように自由度を狭めていくことが大事だと考えます。つまりデータとは縛りだと思ひているんです。

一方、データにはセレンディピタス(予期せぬ発見)と

うか、考えてもいないようなことが起こって面白い。その意味でデータから問いを引き受けます。そこではメタなレベルで面白いかどうかが大事で、知見のもつインパクトや意味解釈といった部分の面白さはすごく気にしますね。

筒井 おっしゃったことは社会学でも当てはまると思います。「実証する前に、九割がた作業を終わらせておくように」と言う研究者は多いです。考えて考え抜いて、そしてデータで縛りを受ける。そうしないと逆に、意外なことも見つからないということもあると思うんですよ。

社会学の「導入」はなぜ長い？

筒井 社会学の論文を他分野の方が読むと、たぶん「イントロダクションや先行研究への参照がすごく長いな」と感じるとと思います。結果、論文の分量も長くなる。典型的なサイエンスの分野だと短く切れ味のある論文のほうがかっこいいかもしれませんが、社会学だとすごく長くなる。

亀田 その昔、社会学の先生とお昼を食べていたときに、「理系の博士論文って薄いですよ、社会学はこんなに厚いんです」と言われたことがあるんです。私は理系ではありませんが、若干カチンときて、大人げないのですが、『ネイチャー』に掲載されたワトソン・クリックのDNAの論文をコピーしてもつていて、「この論文は世界を変

るために、参照したくなるものが他にいっぱいあってくるんです。一つ概念を取り出すと、絡まっている他の概念も一緒にザーツとくっついてくるイメージで、切り離してしまおうと論じたいことの質が変わってしまう。そういう感覚が社会学にはあって、説明がどうしても長くなってしまう。読む側からしたら「結局なにが言いたいのか」となりかねないんですが。

たとえば、「世間ではこう思われている」「先行研究ではこう想定されている」という知見を、まず丁寧に説明する。ローカルな世界についての理解の「粒度を上げる」わけです。その上でやると、先行研究ではフィールドワークの結果やデータが説明できない、という議論が展開できる。ローカルな世界を詳しく説明しないと、何が研究で得られた追加的な知見なのかわからない。だから、社会学者がいくら「発見」をしても、それがニュースになることはない。

数量化のジレンマ

亀田 イントロダクションでそうした概念や文脈を丁寧に説明し、それから調査やフィールドワークのデータを取ったとしますよね。そのデータは、概念や理論にどう戻るんですか？ 一般に、科学の命題は反証可能性を前提とする（データが理論・概念の変更や修正、あるいは否定をも導く）と

えたんですけど、たった二ページ、立ちません。厚さの問題ってどう考えたらいいのでしょうか？」と返しました。

筒井 （笑）。

亀田 それは冗談で言ったことですが、社会学の論文は非常に長くつくり込まれていて、社会学のコミュニティーに対するいろいろな区分けとしての粒度は高い感じがする。でも門外漢というか、研究者であつても領域が外れると、どんなこだわりや差異があるのか、みえにくい気がします。

筒井 さっきの同質性と異質性の話に重ねると、論文の長さはある程度説明できます。同じ人間、「ヒト」のもつ傾向の知見を積み重ねていくタイプの学問なら、共通理解、つまり「いちいち説明しなくてもわかるよね」という要素が大きくなる。ところが複雑でローカルな、異質性の強い社会を説明しようとする、共通理解の部分が小さくなる。だから「まずは、長くなるけど背景を説明しますよ」となる。そうしないと、門外漢の方からは「何しているのかわからない」となってしまう。

亀田 なるほど。DNAの二重螺旋⁶の論文は、世紀の大発見にしては意外に引用数が多くないんですが、それはみんな常識だと思っているから。

筒井 それに、社会学の中で使う概念は、なかなか他の概念との切り分けができない。特定のこの概念について論じ

言われますよね。自分の感覚だと、データは理論を否定するとまではいかないかもしれないけど、我々の思考や議論に強い制約を与えるはずだ、と素朴に考えているんです。

筒井 いろんな答え方がありますが、科学哲学におけるクワインのホーリズム（全体論）という考え方が参考になります。何か理論を反証するような実証結果が出たときも、データの解釈や周辺の理論の変更につながるだけで、中心の仮説は守られる。反証主義は理念ではあつても科学者が実際にやっていることの説明にはなっていないのではない、か、という話です。

でも、データが制約的に作用するのは間違いないと思うんですよ。よくみかける「エビデンスのピラミッド」では、RCT（無作為化比較実験）よりもメタ分析を上に置きますよね。ホーリズム的な立場に立つてみれば、科学的知見の検証がなにか一つの実験で完結することはない。メタ分析をやる必要性はそこにある。同じ実証をしたはずなのに、結果が違ふというのはよくあることです。実験のやり方や文脈、構成概念が研究者によつて微妙にずれた結果、ブレ、結果の多様性が出てきたとしても、メタ的に結果を積み重ねていけば、「全体的にはこう言えるだろう」という緩やかな共通理解をつくることができる。そのように知見を積み重ねていく点では、社会学でも社会心理学でも、実はそ

さない世界が、社会学の中で展開されていることも確かにあります。なぜ測定に心血を注がないのか。自分の都合のいい解釈をしたい人も一部にはあるのかもしれませんが、真つ当に社会学の研究をやっている計量研究者は、なるべくそれは避けようとするサイエンスマインドはもっているはずで。

それでも、社会学の観察は「厳密に測定しようとするほど厳密なデータから遠ざかる」という数量化のジレンマの問題に直面しやすい。たとえば「結婚」という概念一つとっても、事実婚は結婚だというリアリティを伴って考える人もいれば、そうではない人もいる。その測定のと

き、我々は「結婚と思っていたら結婚です」と、調査対象者の判断に任せるんです。サイエンス側の人からすれば「ちゃんと研究者のほうで定義して測定してくれ」と言うかもしれないですけど、社会学者の感覚だと、「結婚」の定義をしているのは、研究者ではなく人々の側なんです。

亀田 なるほど。
筒井 だから「正確な測定」と言われても……となつてしまふ。それに甘えているところもあるかもしれませんが。

もう一つが誤差の問題で、これは社会学の中でも議論があります。計量分析の際、いわゆる「真の値」があつて、そこから外れるものは基本的に誤差として考える立場と、

ルにミルクを注いだのは食事の準備には入りません」のような長い注釈をつけていくことになる。そもそもみなさん回答する上で注釈を読まないだろうし、注釈を読む人と読まない人で結果にブレが出てしまうことも生じる。

私はこれを「数量化のジレンマ」と呼んでいるんですけど、研究者が思うような正確なデータを取ろうとすればするほど、そこから遠ざかってしまうという測定の難しさがあります。結局「ざっくりと聞くのが一番いい」となる。そうするとどうしてもノイズや偶然的要素で結果にばらつきが出てくる。メタ分析が必要だ、となります。

「結婚」を定義するのは社会学者ではない

亀田 自然科学の方と話していて思うのですが、かれらは観測誤差を減らすことに命をかけています。天体観測や電子顕微鏡の開発にしても、それによつて世界の見え方が変わってきた。だから測定することを、それこそ火あぶりを恐れず行なうわけです。でも、文系という括りが適切かわかりませんが、そうした人たちと話していると、観測誤差を減らすこと、測定精度を上げることへの敬意が抜け落ちてるように感じることもあります。

筒井 私はどちらかといえば社会学でもサイエンス寄りだと思いますが、サイエンス志向の強い方からすれば理解で

そもそも誤差と呼ぶべきではなく、最初に立てたモデルから逸脱して出てくる多様性(異質性)の中身こそが面白い、といった立場です。私自身は後者も研究の出発点としてはある、という考え方で、そうだとすれば、誤差を減らすべく測定に心血を注ぐことは逆に効率的ではないかも、とも思っています。

分断を乗り越えるための対話

亀田 「家族」を生物学的に考えるならば、ラットAとラットBが「結婚」したかどうかは、配偶関係を結んで何回交尾したか、あるいは、子どもができたときに父親ラットと母親ラットがどのくらい餌をあげてケアしたか、といった外部観察的なカウントで捉えるでしょう。でも、それは社会学が知りたい問題ではないですよ。結婚形態の変化というときに、人々がどういう意味を与えていくかも含めて、人々が社会の中で生きていく中で、結婚という概念をどう使うか・どう捉えるかに多分関心があるからだろうな、とお話を伺つて思いました。それは自然科学が扱えない領域です。

ただ、交尾の回数などの生物学的な話は、人々の結婚解釈の中のどこか、インフラとしての基礎部分に位置づくのではないかと、とも思います。それが時代や文化によつてい

んなに違はない気がします。

亀田 そうですね。ただ実は私は、社会心理学のメタ分析をあまり信用していないんです。メタ分析はいろんな実験やデータを突き合わせて行なうわけですが、社会心理学実験について言えば概念の側の粒度が低いため、さまざまな結果をメタ分析で集約することが難しいと思つているためです。たとえばSES(社会経済的地位)をどう定義し測るか、社会学の調査では作法に従つた形で測つているからブレないと思うんですけど、社会心理学の実験だと、いわゆる「操作的定義」(「知能」のように直接には計測できない概念を、具体的な実験操作の手続きに置き換えて定義すること)がバラバラだったりして、言葉は同じなのにやつていることが違うという場合も多い。だから、「言葉が同じものについてのメタ分析」をあまり信用できない。自分の場合には、メタ分析よりも、事象の本質を抉り出すようなセンスのいい実験、あるいは測定粒度の高いデータを選択的に信じるという方策を採つています。

筒井 我々も質問紙調査で操作的定義をやろうとはするんですけど、そこはやっぱり難しいです。たとえば、「ここ一週間でどれぐらい家事をやりましたか?」という質問をすると、回答者側で「家事」の理解にものすごくブレが出てくる。理解を収束させようとする、調査票に「シリア

ろんな形の変化が起きてきていて、どう語られるか、社会における結婚の位置づけというのも変わってくるんじゃないでしょうか。生物学的な話と社会学的な話は、対立するものではなく補完し合うものなのだと思いますよ。

筒井 ありがとうございます。こうやって議論ができることと自体が大事ですよ。亀田さんはご著書で「連帯」と表現していますが、異分野の人と連帯・対話をしていかなないと、お互いに対してわけのわからないことをやっている、ということになってしまう。

亀田 私はいま、大学の情報科学融合領域センター長を務めていて、まさに文理融合と対話について考えないといけない立ち位置なんですけど、まさに「言うは易く行なうは難し」です。なぜ難しいのか考えると、メタなレベルの議論を楽しむマインドが重要だと思うんですよ。

今日の話も、筒井さんは社会学の専門家として、僕は社会学ではないところの専門家としてお互いに話ができる。もし筒井さんが社会学の個別の話を長くされたら僕はついていけないし、逆もそうでしょう。測定のことや科学哲学の話など、お互いにひとつ上の、メタな議論ができないと、分野が違う人間では本質的な話ができないし、つまらない。

楽観論かもしれないけど、こうしたメタな会話が、分野の風通しを良くすると思うんですよ。部屋のどこかに開

いている窓があつて、そこから風が流れているような感覚は、コミュニティ全体にとって重要なことなんじゃないかな、と思っています。

筒井 おっしゃる通りですが、今は業績へのプレッシャーや忙しさで、対話をする余裕がないというのものもあるのかもかもしれませんね。

いろんなところで分断が起きている、と言われます。「分断」って難しい定義じゃなくて、対話がないことだと私は思っています。分断されているようにみえても、一時間でも二時間でも対話をしたら、「なるほど、そうなんだ」となるんじゃないでしょうか。対話って面倒くさくて時間がかかるものなんですけど、その回路を加工していくことが大事なのかな、と思います。

(二〇二四年一月二〇日、ZOOMにて実施。構成・小誌編集部)

筒井 厚也 (つつい・じゅんや)

立命館大学産業社会学部教授。一九七〇年生まれ。著書に『仕事と家族』『社会学：非サイエンス的な知の居場所』ほか。『岩波講座社会学』編集委員。

亀田 達也 (かめだ・たつや)

明治学院大学情報科学部教授。東京大学・北海道大学名誉教授。一九六〇年生まれ。著書に『連帯のための実践社会学：共感・分配・秩序』『モラルの起源』『合議の知を求めて』ほか。

ひとり 私暮らす 私たち

中高年シングル女性の
生活

和田 静香 (ライター)

第6回

生涯暮らせる 住まいが欲しい

本連載の三回目、会計年度任用職員として登場ねがった三屋京子さん(仮名)は、地方都市にある実家でひとり住まいをしている。両親が遺した古い家はあちこちガタがきているが、修繕費の捻出は難しい。公的扶助を求めて多々問い合わせをしても、「制度の対象にはならない」とすげなくされたそう。一方で私ごとになるが、四年前から空き家になっていた友人の実家を借りている。家賃が払えきれずより安い物件へ次々引越してきた私に、「月四万五〇〇〇円」で一軒家の一階を貸してくれている。タワマン化する再開発が続いて、家賃が高騰する二三区内では破格の安価だが、ずっと住み続けることは間借りゆえに難しい。

中高年シングル女性の多くは、住まいに困難を抱えている。今回はそれを書いていきたい。

まずは「わくわくシニアシングلز」の調査から。「居住形態」を尋ねた項目で、「民間賃貸住宅」に住む人は四一・八%、「持ち家」は二五・〇%、「公営賃貸住宅」は六・九%だ。その居住費負担は月に五〜七万円が二二・六%、七〜九万円が二二・八%、九万円以上が一〇・七%で、五万円以上が四六・一%と約半数を占める。では居住費支払い後の家計は？を尋ねると、「あまり余裕がない」と「まったく余裕がない」をあわせて六二・六%になる。特に年収三〇〇万円未満では、八二%が居住費を支払うと家計が苦

ガラスのいるか

水沢なお(詩人、作家)

10

出生前検査と「生きられた障害」の時間

二階堂祐子(奈良先端科学技術大学院大学)

230

「最後の独裁者」の素顔 — 渡邊恒雄は何を遺したか

魚住 昭(ジャーナリスト) × 清武英利(ノンフィクション作家)

113

渡邊恒雄論 — 戦中派リベラリストの「悪名」

山本昭宏(神戸市外国語大学)

121

日本は性暴力をどう裁くのか — 米兵少女暴行事件が示すもの

小川たまか(ライター)

136

いじめ後遺症 第1回 見えない長期的被害

斎藤 環(精神科医)

144

アウシュヴィッツの焼却炉 第2回 社会の中の共犯者

中村真人(ジャーナリスト)

242

ファシズムは読書で、レイシズムは旅で治る 第2回 文化、このやがていなるもの

前川仁之(ノンフィクション作家)

265

イデオロギーを溶かす — 「脱北者」アーティスト・ソナムの表現

古川美佳(朝鮮美術文化研究者)

255

二の社会の社会学 第2回 人々から問いを引き受ける

筒井淳也(立命館大学) × 亀田達也(明治学院大学)

210

本とチエック 第22回 Poem Post

金承福(フランス代表)

262

読書・観賞日記 読んで、観て、聴いて

中村佑子(作家、映像作家)

273

言葉と言葉のかくれんぼ 第11回 私の言葉を守るために

チヨン・スゴン(翻訳家)

41

ひとりで暮らす私たち 第6回 生涯暮らせる住まいが欲しい

和田静香(ライター)

最後は教育なのか? 第8回 不登校が映し出す学校像 — 酒井朗さんに聞く

武田砂鉄(ライター)

隣のジャーナリズム — 「科学的根拠」の罠

須田桃子(科学ジャーナリスト)

あたふたと身支度 第6回 自分では纏まないと

高橋純子(劇団新龍)

「変わらない」を変える 第22回 ボランティアという抵抗 トランプ大統領就任の日に

三浦まり(上智大学)

脳力のレッスン(273)日本の一九二〇年代 — 戦間期の日本と石橋湛山

寺島美郎

片山善博の「日本を診る」(184) 新首相が自信をもって就任できるためには

片山善博(大正大学)

アジアとアメリカのあいだ 第3回 戦争がそのあとに残すもの

望月優大(ライター)

ドキュメント激動の南北朝鮮 第331回(24・12・25・1)

編集部

記憶をもった鏡 — 山本美里「透明人間 Invisible Mom」

戸田昌子(写真史家)

岩波俳句

張・文 池田澄子(俳人)

読者談話室

編集後記

296 294

表紙本版画 — 久保倉己(表紙 55年の目画像 1981、裏表紙 涙のつしと家 1981)

キャラクター・扉絵 — 西村ツチカ

アートディレクション — 須田杏葉 本文デザイン — 大原由衣 + 安賀裕子